

協会の歩み 111号 平成20年12月

北海道ペストコントロール協会

FAOPMA東京大会

平成20年11月4~6日 東京国際フォーラム



JPCA 須田会長による歓迎の挨拶



川口順子元外務大臣の基調講演

日ペ須田会長の英語での歓迎の言葉で始まったアジアオセアニア害虫防除協会連盟(FAOPMA)表記の日程で東京国際フォーラムで開催された。川口順子元外務大臣の基調講演は環境大臣だったこともあって、温暖化の危機を訴え、そして感染症の地球規模の拡大を防ぐには、PCO業務は必要であると愛知県の洪水や茨城県での鳥インフルエンザ対策に尽力した県協会の働き振りを参加者に紹介した。素晴らしい幕開けであったが、薄暗い倉庫のような大部屋、そして劇場型ではないフラットな床に違和感を覚え、華やかさに欠けると感じたのは私だけではなかったと思う。参加国は韓国、中国、香港、台湾、フィリピン、マレーシア、インド、ポルトガル、USA、カナダ、イギリスなどであったが、アジアからの参加者が思いのほか少なかったようだ、これは急激な円高の影響であろう。それでも総参加者は700名と、ほとんどは日本人であった。特に40周年をむかえた東京都からの参加者が多かった。

講演は観念的なものと技術系に2別されるが、USAとドイツからの発表者の概要は、1、自ら積極的に働きかける、待ちではダメ、2、時代の変化と技術革新に対応する、3、Greenコントロールであったと思う。しかしこのGreenが問題で同時通訳者は「地球に優しい」と通訳したが、この日本の標語の方がはるかにわかりやすく、また素晴らしい言葉であると思う。欧州米国ともに、なんにでもGreenを連発し、IPMが薄れている感があるらしく、Greenコントロールでなんの防除効果も上がらないことも有ると、薬剤が売れなくなったバイエルの講演者がぼやきとも取れる一幕もあった。欧州PCO協会(CEPA)の現状を説明したロブキャット氏、総売上高が日本のそれより低いのが、USAやカナダの社長が自社の宣伝をしながら、余計なお世話とも取れるような押し付け自慢話をする中で、USAと日本の協会からの教えに感謝すると言い、大変紳士的な講演に好感が持てた。

感染症に関する講演は日本から小林睦生博士、外国からジョナサンベッグ、ロバートクンストの3人が講演をしたが、小林博士の講演がデータと図を示しながらの格調高く、解りやすい講演であった。外国人の講演は只でさえ英語がわからないのに、図や表が少なく、観念的な言動が多くて、理解しにくかった。どちらかといえば、技術屋と言うよりコンサルタント的な言動が多く、日本人講演に軍配を上げたいと思う。

その中であってマレーシアで都市型害虫を研究しているチュン、ヤン、リー博士のアルゼンチンアリに関する講演は豊富な写真や図を用いて、非常に解りやすく、興味をそそる講演で彼にだけ質問が殺到する人気ぶりだった。プレゼンのうまさは、彼の納豆とシシャモが大好きと言う日本びいきによるサービスなのだろうか？この講演に大いに発奮した田原博士、ゴキブリの最新情報として、種類別齧り痕跡や糞の形状と粘度、同じビルの同じ階で店ごとに、薬剤抵抗性比

が違うという貴重なデータを原稿用紙を見ずに、熱っぽく語った。

前回の横浜大会では技術関係とマネジメントや観念論の2会場に分かれての講演会であったが、今回は講演数の少なさから、1会場であった。また、隣接する展示場の小間数は36、これも横浜大会より少なかった。原因が急激な円高とは考えられない。世界的に害虫研究者が少なくなったことと、売れなくなった薬剤と機器関係の開発が激減したためであろう。また、日本人は日本語での質問が許されたが、日本人も英語で質問するなど、普通の人が普通の質問をしにくい雰囲気でもあった。

来年は北京での開催、ところが専用ブースの現地人は中国語しか話せない、初日のウエルカムパーティーにごっそり参加したので、聞くとお役人ばかりで翌日からは来ない。拳句には中国PCO協会と中国機器会社のブースの後片付けをしないなど、まったくお役人の接待をしない日本に来たのじゃないかと疑いたくなるほどあきれた連中だった。

(文責青山)

小林 勲(榊かんきょう)さん環境全国大会長感謝状

平成20年度生活環境改善功労者として表記の大会にて感謝状が授与されることが決定した。9月18日付け北海道PCO協会への通知文によると、10月29日埼玉県さいたま市大宮ソニックシティで開催予定の第52回全国環境衛生大会式典において、授与されることになった。